

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十七年一月一日発行（毎月一回一日発行）
第十一卷第九号（通巻第一二九号）

鈴



ぐるっけ

新春号

俳句雑誌

GLOCKE

第129号

1. 2005

謹賀新年

名所図絵

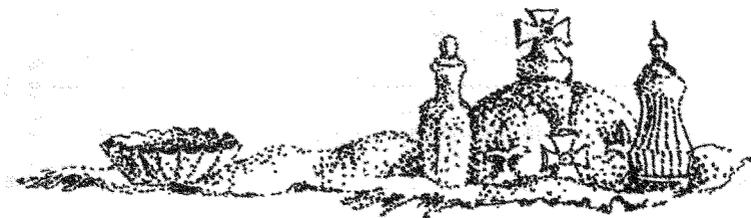
品川 鈴子

古書市に入り浸りたる聖き夜

クリスマスじつくり老いの古書漁り

古書選ぶ聖夜の和綴ち名所図絵

クリスマスカードと撰津図絵を買ふ



サンタ装忽ち児らを誘おびき寄す

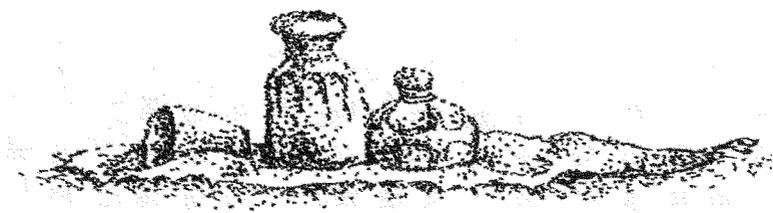
麻酔より覚めて個室の聖夜なる

砂子ちりばめオホーツクの女王鮭

オホーツクの新巻われと睨み合ふ

塀を越す柚子熟れ邸買はれたり

九十九折れ雪路配達恋の文



玉鈴

東京 彦坂 範子

落書の路地に秋風とどまれり
雁渡る路地に夕べのひろがりぬ
観覧車遠景に雁渡りゆく
霧立ちてロダンの像をぬりこめる
溪谷の紅葉水音までも染め

愛媛 福田かよ子

茅葺のバス停で食ふ栗むすび
はぐれ猿山荘のぞく秋の怜え
野分すぐ岩観音に涛尖^{とが}る
長寿村台風寸断して去りぬ
道祖神抱き合ふ前の稲を刈る

兵庫 藤田かもめ

台風におのころ島も崖崩れ
影二つ即かず離れず大花野
家中の障子張り替へ七七忌
形見分け遺愛のセルの軽くして
秋の風中華街より色持ちて

吟

大阪 藤田 京子

釣り上げし鰯放しやる太公望
鯖街道廃屋隠す蔦かづら
コスモスや鯖街道の番所跡
天高しメタセコイアの並木道
塩害の石榴は褪せて誓子の居

兵庫 史 あかり

一枚の葉もなき枝の柿百顆
一木に千顆育み居る林檎
秋灯を消せば秒針音満ち来
ゴールなき句の道秋の日暮れて
澄む水に流せぬ言葉澱みをり

愛媛 星加 克己

なぎ倒す竹の高さに秋出水
軒うつや野分くづれの雨柱
芋みな同じ旋毛の八ツ頭
城山の土に踏みけり金鈴子
木の実落つかさとも鳴らず死亡記事

香川 細川 知子

去年脱ぎて今年湯舟に身をのべし
初詣真夜のこんぴら人の波
初電話母の口調を真似てをり
大道芸初御空へと剣廻す
あれこれの物を手近に三が日

兵庫 細野 恵久

ポケットのもの移し換へ年迎ふ
朝の鴨鳥の上を飛びゆけり
電流の凍てて火花を散らすなり
篠藪の途切れに吠ゆる冬の海
春を待つティッシュが函を立ち上がり

香川 松井 洋子

秋水に命の影のかすかなり
桐一葉軋みて廻る風見鶏
松手入すみて松の香さらに濃し
生真面目を貫きし父夕端居
定刻に渡船の着きし秋の潮

千葉 松浦 途子

鷹柱崩れジェット機飛び立ちぬ
機嫌良き乳母車の児竹の春
父と子の行進旗めく捕虫網
金メダル五つも下げて案山子反る
穏やかに生きたき老後大野分

愛媛 松本 恒子

忘れ名を思い出したり梨噛んで
乃木少年踏みし唐臼からうす蟻蛸とぶ
柿熟るる島に忘れし片ピアス
実石榴に夕日とどむる蔵の街
島一つ跨ぐ架橋の青蜜柑

愛媛 三浦如水

稲雀轟音立てて田を襲ふ
翳りても濡れても炎ゆる曼珠沙華
群れなしてゐても寂しき曼珠沙華
秋灯下膝に緋く広辞苑
月影を曳きて舞ひ初む野外能

薬草歳時記

(二二八) ナズナ (薺草)

三 輪 慶 子

七草の一草まじるスパゲティ

品川 鈴子

この一草は実際は何だったのでしょうか。主宰のこの句は海外詠ですので、芹などの香りのよい草でしょうか。又は無などフレンチでよく使われる野菜かもしれません。お尋ねできないままに、この句を出させて頂きました。ご存知のとおりナズナも七草のひとつで、こういった料理に良く合うのです。

以前ぐるっけ誌上で七草をまとめて紹介しましたが、ナズナは七草粥の主役の草ともいえます。「七草なずな唐土の鳥が……」がと唱えながら七草を刻みます。

ナズナはあぶらな科の二年草で、江戸の頃は蔬菜として、吸い物、あえ物、おひたしなどに使われました。食用には茎立ちする前のロゼット状の葉を根っこごと掘り取ります。白く細い根がついていますが、よく洗って茹でます。葉の根元がおいしいのは、他の野菜と同じです。あくが少なく食べやすいのです。

この頃は冬暖かく、ナズナもすぐに花を持ちますが、そうなるほど硬くなって、おいしくないので。ロゼット葉を若菜として食用にします。

花は白く小さく次々咲き上ります。花の後三角の実がつかみます。振ってみると確かに音がします。ペンペングサとも三味線草とも言われる所以です。

薬効としては「五臓を利し、目を明にし、胃を益す」とあります。花の頃、全草を刈り取って洗って干しておきます。煎じて飲めば、便秘を治し、高血圧症に良いといえます。検証しようもありませんが、緑黄野菜の効用はあるということでしょう。

「なずな売り元はただだとねぎらるる」という川柳があるのですが、ナズナを売るほど摘むのもなかなか大変です。草取りする時は、ナズナばかりと思うのですが、若菜を摘む一月六日となると寒さで体も動かず立ち尽くすこともあります。旺盛な繁殖力で北半球の温帯全域に分布するナズナ。今年の薺粥を手始めに、野草の料理をお楽しみ下さい。

参考文献 「薬草カラー大図鑑」 主婦の友社

著者略歴 神戸薬科大学卒

ナズナ・ペンペン草 [ナズナ属] (アブラナ科)

總状花序

Capsella bursa-pastoris Medicus
薺 (英: Shepherd Purse)



薬用部分：全草

中田 芳子 画

ま

よくみれば薺花さく垣ねかな	松尾 芭蕉
俎に薺のあとの匂ひかな	内藤 鳴雪
庵を出でて道の細さよ花薺	河東碧梧桐
猫のゐてペンく草を食みにけり	村上 鬼城
簷しづく三味線草に土うがつ	長谷川素逝
黒髪に挿すはしゃみせんぐさの花	横山 白虹
ひとり摘む薺の土のやはらかに	中村 汀女
昨日より今日新しき薺花	細見 綾子
大利根の霜をかきわけ薺つむ	加藤知世子
なずな粥大地の力もらひけり	宮原 利代

ぐらっけ

鈴の奏

品川鈴子選

シスターが自転車で行く奈良の秋 大阪 武田ともこ

明日香村その満面にまんじゅしゃげ

つりふね草まだせせらぎの飛鳥川

葛の花変事を告げる早馬^ま往きし

雨戸繰る響きに芙蓉はたと落つ 東京 遠藤とも子

秋の夜の大航海や壘の内

くちづけもあらむ秋空観覧車

台風来とりこむ名もなき植木鉢 兵庫 川合まさお

秋茜手配書の立つ五番寺

白残る店継ぎし子の新豆腐

彼岸花ばきばき折った首飾

格子戸の忌中の町家酔芙蓉 兵庫 池田 久恵

野分あとへりコプターの音響く

来年は駐車場とか稲架襖

病室の額の中から花野かな

大当りさけて小当り栗ご飯 兵庫 井上加世子

海近きビルには土囊台風待つ

風落ちの柿を拾へり屈背^{くぐせ}婆

廃線を歩く帽子に零余子入れ

黒猫の長き尾に散る金木犀

中継の菱舟やはり転覆す 佐賀 森田子月

銀杏を分ける兄妹異議はなし

敗荷^{やれ荷}の奥に佐賀城大座敷

稲刈りし田は熱気球^{バルーン}の離発着 香川 近藤倫子

ソナチネの仕上がり近き十三夜

運動会もう逆立ちを諦めし

犬小屋も犬も流して秋出水

決戦のベース露けき芝に置く 愛知 市川十二代

信玄の隠れ湯の山ななかまど

罪の無き黒き蕎麦の実叩きけり

露踏んで片手で搾る山羊の乳

草風の手裏剣攻めに遭ひにけり 兵庫 長谷川とし系

世界一大佛おはす霧の中

気がかりな台風なれど観劇に

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句く十五句 三輪慶子 "

* 選句は全て 品川鈴子

葛の花変事を告げる早馬^{うま}往きし

武田ともこ

いにしえの都だった飛鳥の辺りを歩くと、おのずとその名残を感じる。葛のはびこり咲く径は、大化の改新の端緒を告げる早馬が一散に駆け抜けたのか。つい昨日のように古代政治史の大事件が身近に想われる、中央集権国家への幕開きは劇的だった。

白残る店^に継ぎし子の新豆腐

川合まさお

選りすぐった新大豆を、前夜から水にふやかし、石臼で丹念に挽いて、苦汁^{にがり}を合わせ凝固させるのが昔の豆腐作り、村でも一番早起きは豆腐屋だった。美味しさは格別で、お使いの帰りに半分程平らげてしまいう子もいた。ともあれ殆ど一律に機械化して味気ない折から、後継ぎに拍手を送りたい。

秋の夜の大航海や壇の内

遠藤とも子

上五と中七では汪洋たる海原に船の航跡を残し、果てしもない旅愁を募らせる。かと思えば下五の落ちがあつて、ポトル・シップとは。そのマクロとミクロの思念の界を往きつ戻りつ夜長の虚に遊んでいる作者。まさに俳諧連句の自在さそのものでしょう。

罪の無き黒き蕎麦の実叩きけり

市川十二代

蕎麦はタデ科の一年草で、荒地でよく育つ救荒作物。飢饉を助ける有用植物ですね。それを罪のなきと叙して「黒き」と「叩きけり」を引き出されました。草の実なので朝露の残るときに刈り込み、乾かしてから叩いて脱穀する。その脱穀の様を詠まれ、又叩くことの後ろめたさも感じることが出来ます。

露天風呂鴨の一群眼前に

長谷川としゑ

この頃は温泉ばやり、露天風呂ばやりで、川べりの露天風呂も混浴等と言うことなく、造作よくできていてのんびりできるのでしよう。そこを突然鴨の群れに覗かれる事になって、幸せの中の小さな驚き。「眼前に」で露天風呂の位置が良くわかります。

沈黙も二人の会話居待月

木野 裕美

居待月は十五夜を過ぎて十八夜月。少しかけ始めた月が一時間程遅れてのぼってくる。居待月のゆったりしたイメージによってご夫婦も円満の域にあるお二人が想像できます。以心伝心と言う境地でしょうか。居待月が良いと思います。

寡黙なる男の机上大通草

岩木 眞澄

寡黙な殿方にこの頃出会わなくなりましたが、やはり何処かにいらっしやるのでしょうか。その机の主が置いたのか、誰かがプレゼントしたのか、そんな事は全て省略して大通草。きつと口を開けかけているのでしょうか。面白い取り合

わせ。

来年は駐車場とか稲架襖

池田 久恵

稲架はこの頃少なくなりました。コンバインの入れない変形の田や、稲藁を取りたい時に架けるようです。来年は駐車場と言うのですから、住宅が迫ってきたのでしょうか。或いは後継者がいなくて廃業するのか、そんな農業の状況が浮かんできます。

黒猫の長き尾に散る金木犀

井上加世子

色鮮やかな絵を見るように思いました。長き尾をだした事によって動きがでできます。小さな金木犀の花びらが飛ばされているかもしれません。また散り敷いた金色の花びらを、尾ではき寄せて戯れているのでしょうか。